

門ル3
諸28
卷3

東京
學校
圖書

西遊旅譚卷之三

共
三
十
三
日

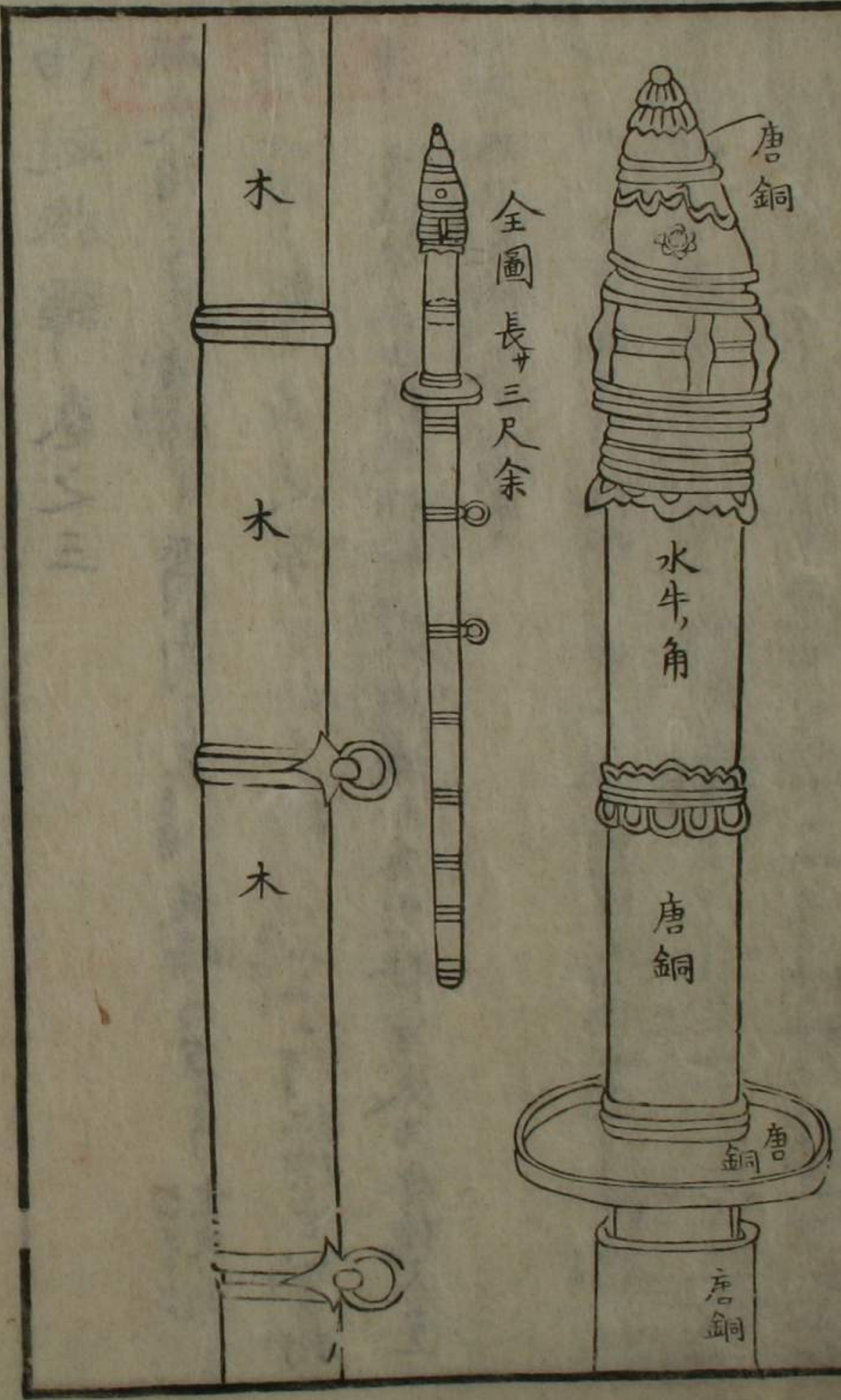
長府をさく檀浦より赤間関に至る長崎の方より玄界灘を渡り此港へ船をうけし家一里餘を瀬戸口山上の阿弥陀寺寶物の御太刀異形故ぬ図も

十月三日下関より九州の北に渡り時に大風吹出波濤高し時人色をうしそよ風多難し大津に著る此後大津小倉、此海中に次兵衛塚といふ所へ秀吉乃引島を三里なり田首も云平家の二門引退きし所なり

百
三



安德天皇御太刀之圖



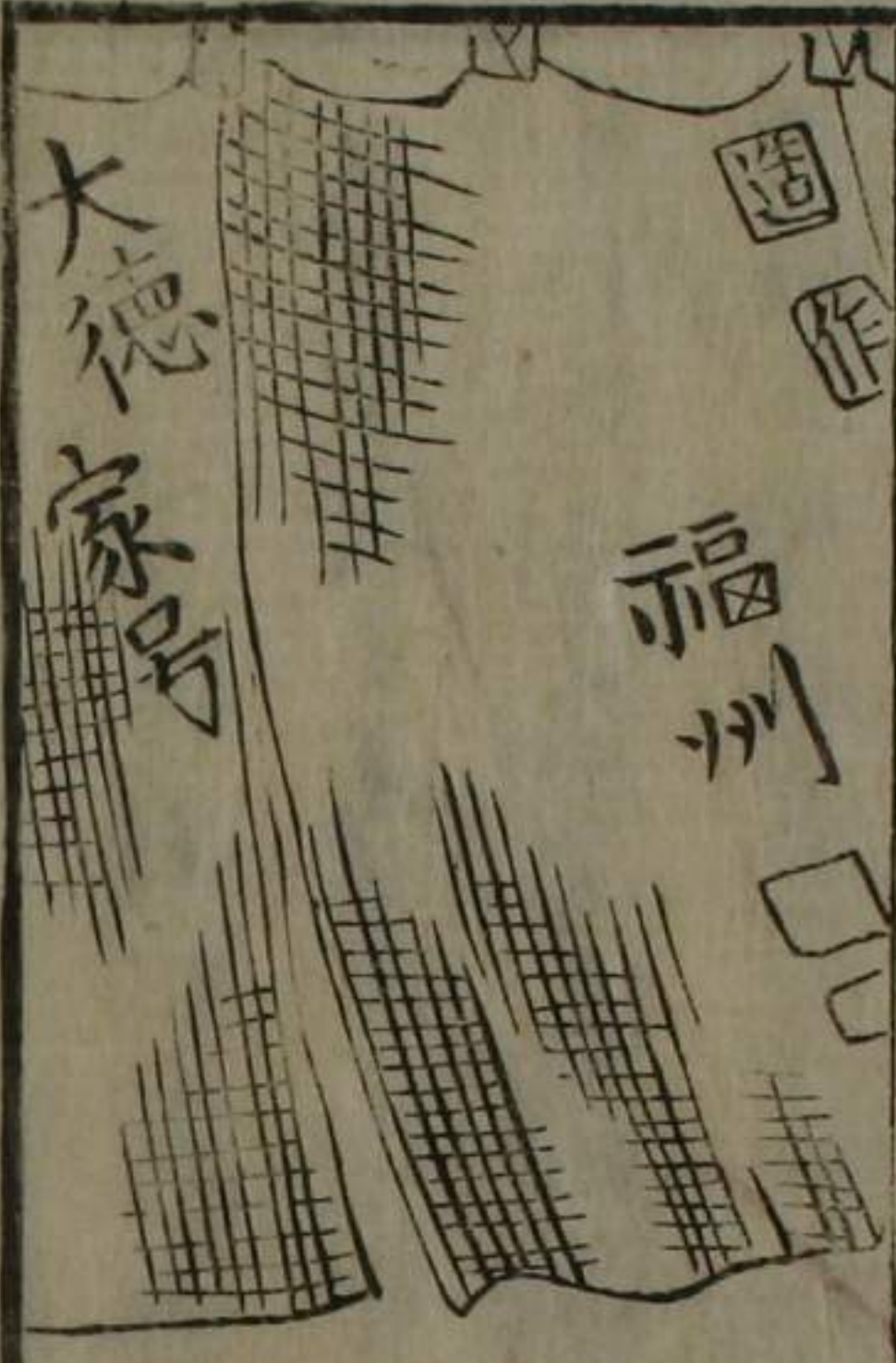
大裡人家二三町有小倉まゝ一里半初々海を左の方へ入る小倉
 乃城をゆる別小笠原疾十萬石乃城下を市街縦横を夫々
 筑前れ地黒崎の驛に名此地を長崎乃方を月よりまきつて
 時雨々々風雨多し東方ハ十月の小六月を東西風にまきし
 づれに多し小屋の湫飯塚の間五里あり田邊川をこに鶴まゝ
 真鶴ベナシ白鶴シロツル白鶴ハ全體白シシロツル黒鶴クロツル筑前の地總々平野田
 畑に多し飯塚と内野れ方右の方に入田畑をまきつて
 山路をゆるり四里太宰府をり此路甚乃山中かゝ大石
 道路を塞ぎ十間又ハ五六間をまきつて天満宮大をり

旅館門をく他り橋三ツあり過現来ノ山門をく本社左
 右廻廊に〜沖まびり地をり他乃香大楠多し毎年
 八月廿一日より廿六日まで祭禮近郷より多路多し天原山
 安樂寺寺ニアラス岩踏川社乃社の方三里を在思川
 宰府町西流る川也愛深川社れ南あり哥に
 白川ハ宰府町西南にあり哥に
 観世音寺清水山博多博多戒壇院戒壇院観世音寺

西遊記 卷之三
 一
 々々近一都府樓の跡也又安徳天皇乃殿の跡と云先年
 此寺本堂より下より瓦二枚を堀出し生焼くも赤色伊部
 府の如しと云人の物と云是都府乃古瓦より菅
 丞相乃付りて後見瓦色此寺より六七町をさる田乃
 中に礎あり方五六尺央より丸柱の象あり總て此色
 缺瓦多し表に志願と云裏布目あり陸奥多賀城の瓦
 の如し二日市針よりれ色と云見る幸橋の如し
 多しと云るもさるるゆけし先年と云る
 四方寺山高橋招運う城跡と云天拜天神の祠ハ温泉町の

上天拜山乃中程にりり漆川哥也
 名々山乃中程にりり漆川哥也
 其外外野の園より水城乃其の古跡を堀幸府四面
 山繞て海ハ福岡の如しに隔りて故り寒月雪深しと云
 夫々原田、出り田代、ゆき雪の如し高良山より中
 原より彦山、ゆき雪は是より六里又又畠米の城見
 有鳥疾十カハル
 の城下中春より神崎の古妻鶴多し此所より高麗
 鳥と云又此所より索野と云る作賀銅鳥疾の城下
 町二里餘人家はる富高なる婦人乃此の所

江戸の似たり境原のまあり一丈を一丈の二丈の二丈
 ともなひ異なり此を越けて石乃きびきき
 中まの寒月雪を移り二三尺小田にあり此の
 農人の家ごとに暖かさをとるに麻布のうり此の
 支那より荷物を包むる造り圖のや



夫より成瀬のり又塚崎のり野茶より彼本
 此者大山坂のり程々大村のり十町より左に家中路の
 半は程を植るをこれ大村城下人家は十月九日市
 街戸毎に海道を張香を焚いてこれと向ふ此地抱槍
 此より小島より小島より景又佐長井といふ
 此より舟より海道を小島より景又佐長井といふ
 此より里筋石道端に中野村平野村といふ
 此常の犬をえは皆神といふ小童多し筒袖といふ
 唐人風

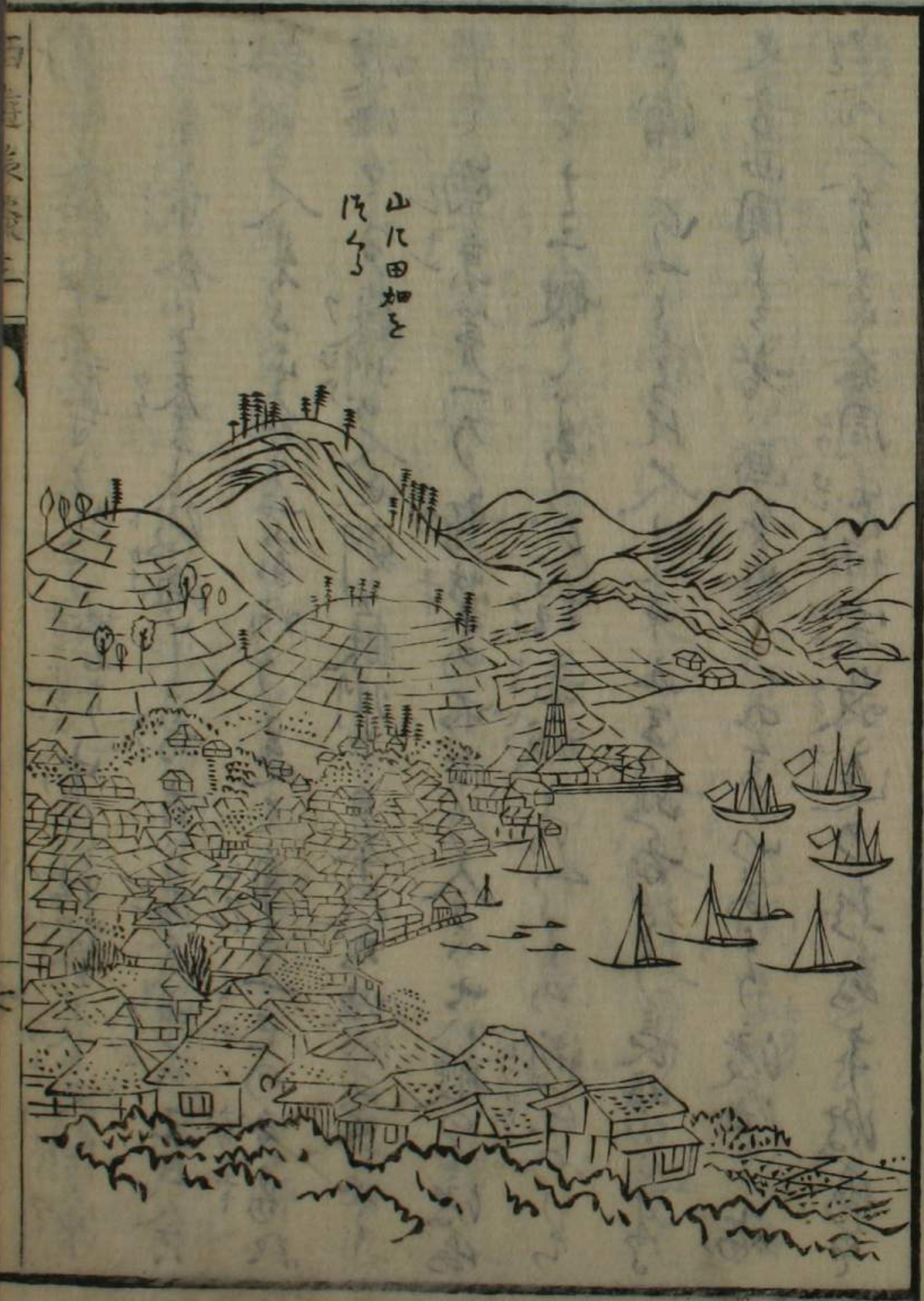
鯖魚石敷文二海
上の石巻く懸
土民の口サバといつる魚を
焼てしし〜〜〜石を
たやく〜〜〜人々と
焼く〜〜〜る〜〜
〜〜〜る〜〜〜る



山崎大石
佛をきき
長崎入る



又石階多^{サガ}大石に佛を刻^{キサム}し〜〜村々を胡羊^{ヤキ}豚^{ブタ}
雞^{トリ}を畜^{ヤシ}す長崎市中唐人^{タウジン}和蘭^{オランダ}に售^{アキ}西坂より長崎を
坂を下りし〜〜留^{トド}る長崎市中海岸の家々
故^{イレ}石階多^{サガ}又橋も石を^{ツク}作^{ツク}婦人^{メノ}の生^{セウ}眉^{メイ}を剃^{ツラ}り脂^ニにかま
輪^{リン}を^{ツク}言^{コト}傳^{ツク}つら^{ツク}放^{ハク}言^{コト}つら^{ツク}左^サニを載^{ノス}見^ミハボウ
姉^{アネ}或^シ娘^メを^{ツク}〇^{ツク}ゴ^{ツク}人^{ツク}の妻^メを^{ツク}〇^{ツク}カ^{ツク}ツ^{ツク}サ^{ツク}色^{シキ}情^{ジョウ}を^{ツク}〇^{ツク}相^シ思^シ
壇^{ダン}石^シを^{ツク}〇^{ツク}キ^{ツク}ン^{ツク}バ^{ツク}四^シを^{ツク}〇^{ツク}バ^{ツク}セ^{ツク}ウ^{ツク}遊^{ユウ}里^リを^{ツク}〇^{ツク}ス^{ツク}子^シフ^{ツク}リ^{ツク}番^{バン}椒^{ショウ}
を^{ツク}〇^{ツク}コ^{ツク}シ^{ツク}ヤ^{ツク}ツ^{ツク}物^{ツク}を^{ツク}〇^{ツク}シ^{ツク}ケン^{ツク}カ^{ツク}ア^{ツク}ジ^{ツク}イ^{ツク}を^{ツク}〇^{ツク}コ^{ツク}レ^{ツク}シ^{ツク}子^{ツク}
を^{ツク}〇^{ツク}ヤ^{ツク}ツ^{ツク}ト^{ツク}親^{ツク}父^{ツク}を^{ツク}〇^{ツク}チ^{ツク}ヤ^{ツク}ン^{ツク}と^{ツク}又^{ツク}言^{ツク}の^{ツク}中^{ツク}に^{ツク}〇^{ツク}バ^{ツク}ツ^{ツク}テ^{ツク}〜



山八田加と
はく



西坂より長崎を望む
旗を多くし紅毛の船
も多し支那船二三艘も
紅毛船八月港を出し一里を
隔り高崎にゆく
支那人館八十番寺より低く
る

西遊記
その節、新しき風の土暖く、空は月雪の園中に橙植
用ニ 琉球芋多し 赤白 赤蕪大根 短ケラノ尾
稲作 方

文邦人館十善寺寺ニアラズ地名ナリ中に社稷ツチガミを設け又開帝カウテイ
 堂を帝命を奉る渡海トカイ者古ハ氏中ハ王氏今ハ
 錢氏の人多シ其家ハ是を自分一己の交易に
 渡海者皆蘇州ソウジウの人也則蘇州ハ日本北太坂の地ナリ
 今ハ七八艘の渡海
 一々南京第一乃繁榮の地ナリ今ハ七八艘の渡海
 一々二艘と多ク程赤城セキジウの地ナリ浙江セツコウの地ナリ
 乍浦チャウの地ナリ凡そ十五年以前より長崎より
 又方西園フサイエンの者ハ画を好ムハ九年以前より渡海者福
 建の人多ク其系周王シウワン宋敬進ソウケイジンの地ナリ近年渡海者

少くも書畫シヨクガを修ムル者多ク其名もよく凡そ
 草亭ソウテイ撰庵センアン宕山タウサン可亭カテイの書を好ム伊字イジ九山クウサンの画
 亦好ム此等高賈コウカハ交易の餘暇ヨカ此技キハ日本
 高家コウカも哥俳諧カハハハ書畫を好ム凡そ是ハ此等
 能画能書或文雅ニハクニハクシヨアルハズガを賞する人ナリ凡そ此等南嶺ナンリウ一人
 能畫ニハクガより画師エカシ多ク又近年より方西園ハ交易に
 疎コソめ画を好ム多ク水墨スイゾクより着色サシキを好ム師也
 今者周西山シウシヤン名ハ選此一人ハ北京ペキンの産者也遊歴ユウレキハ南
 京キンより頃長崎コウカキへ来る此等一人ハ文雅の者也能書畫ニハクシヨクガ

支那の一日をるるに帰帆を官を避るるも此れ南
 京寺或悟真寺に度々應對して書畫を見る又
 此方にも画など贈る總て支那人の日本人もつら
 事なり志もあふ似たり雅も俗もつら又顔面
 日本人の如く只衣裳のみ多しつらのみなり

支那人之圖

明之人の清の代と
 乾隆五十二年
 也風俗如圖
 頭ハ剃リヲ剃テ
 中ニ髪ヲ置



少くも書畫を作らるるも此れ其名なきもつら
 草亭撰庵宕山可亭等書を著る伊字九山水の画
 たり皆此れ高賈に交易の餘暇此技つら日本
 高家にも哥俳諧書畫を著るもつら是れは
 能画能書或文雅と賞するたれんもつら沈南蘋一人
 能畫より画師なり又近年あるもつら方西園は交易に
 疎め画を著るもつら水墨を著るもつら師也
 とも者周西山名選此一人は北京の産なり遊歴して南
 京に來り頃長崎に來り此れ一人は文雅の者なり能書畫



乾隆帝 天下を巡狩
すべし 四度 歳九十餘

支那人の圖
 明之人の清の代
 也 乾隆五十二年
 也 風俗 畫
 頭ハ 髪ヲ 剃テ
 中ニ 髪ヲ 置
 下人
 日本人之如く只衣裳の多ぶひらののみなり
 京寺或悟真寺に度々宿對して書畫を見る又
 此方とも画をど贈る總て支那人ハ 日本人より
 幸なり一志をなす似たり雅も各もつり又顔面
 日本人之如く只衣裳の多ぶひらののみなり



下人



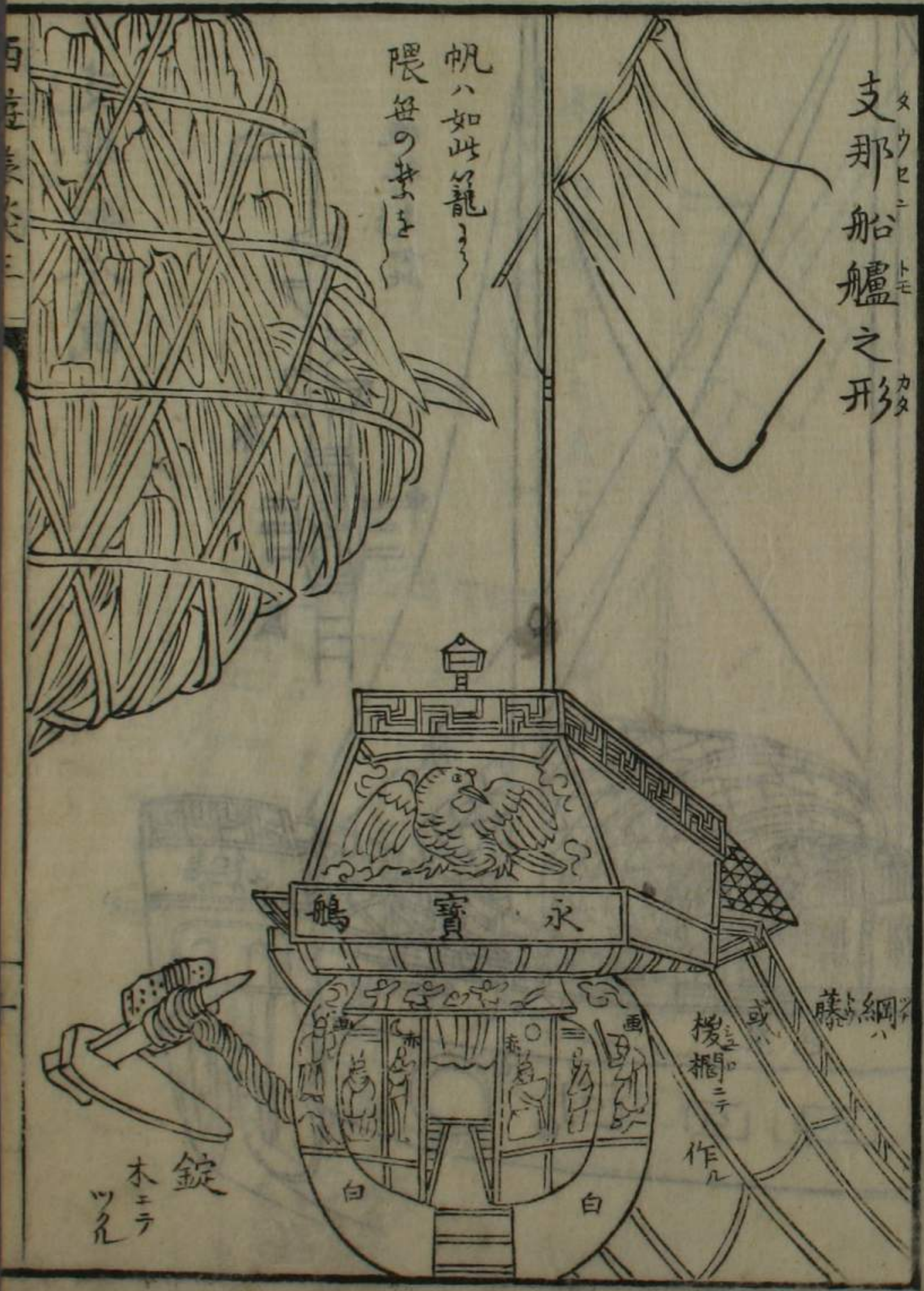
露臺之圖 (夏月涼所)

支那人居宅ハ日本々家を作り口を
ぬきつゝ作りしを日本のみ
客おもしろく毛壇を敷也

支那船ハ梅ヶ崎と云ふ所の船の
大きは十五六間帆ハ布にあり
藤を以て籠をつくり内は隈
笹の葉を布錠と木を以て
製艦乃方人物或は鷲の形
を於縁を以て彩画事甚
俗なり其外を黒塗に
四角ある形を白く画是ハ佛郎
機ノ形を画にかきしもの也

支那船艦之形

帆ハ如此籠
隈毎の葉を



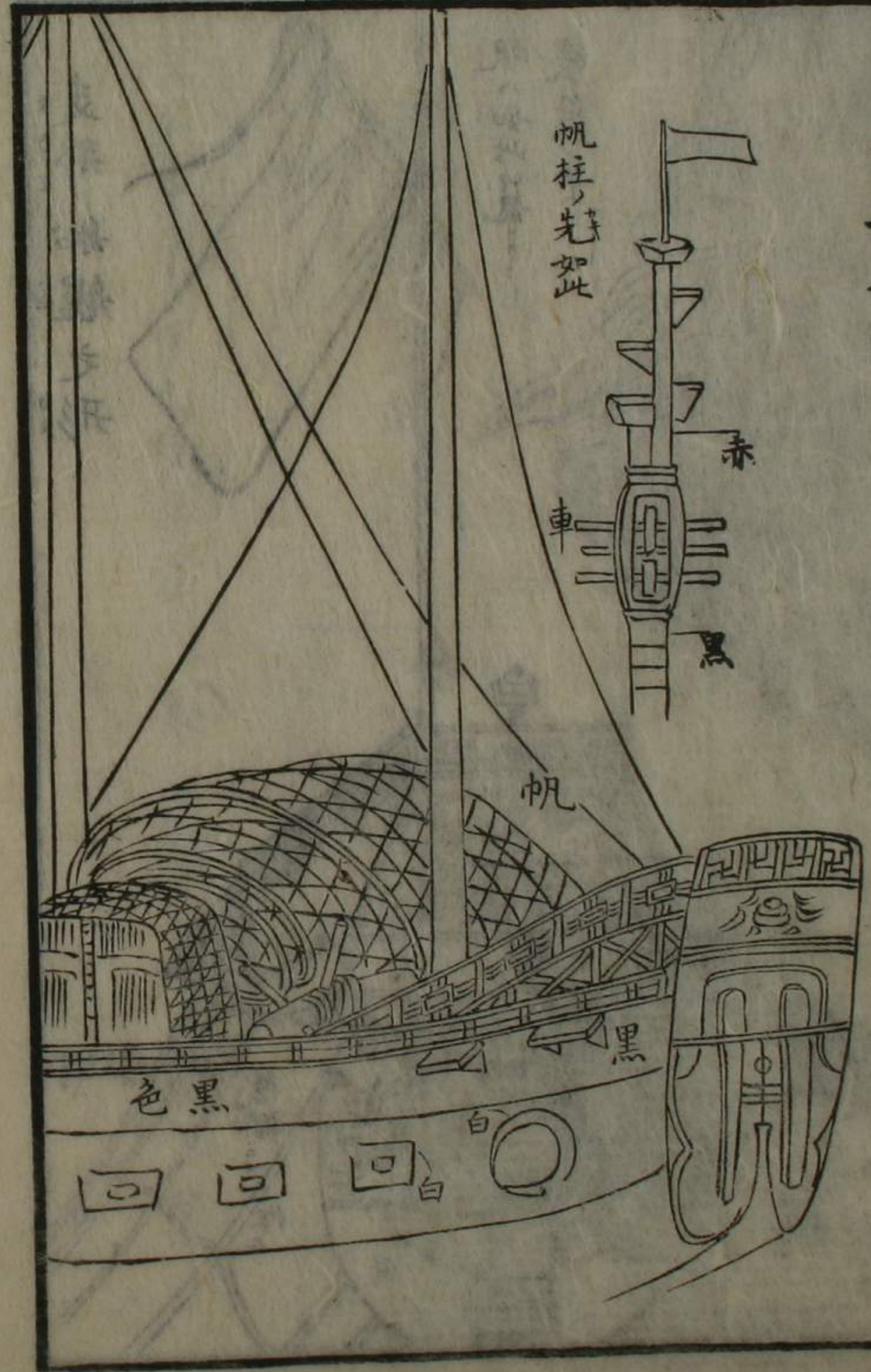


船ハ日本船ノゴトク奇麗ニラス
皆アラ木ヲ以テ製ス

竈

是ハ掃郎機ノ
カタチヲ胡粉
ニテ描
名ナリ

支那船全圖



帆柱ノ先如此

赤

車

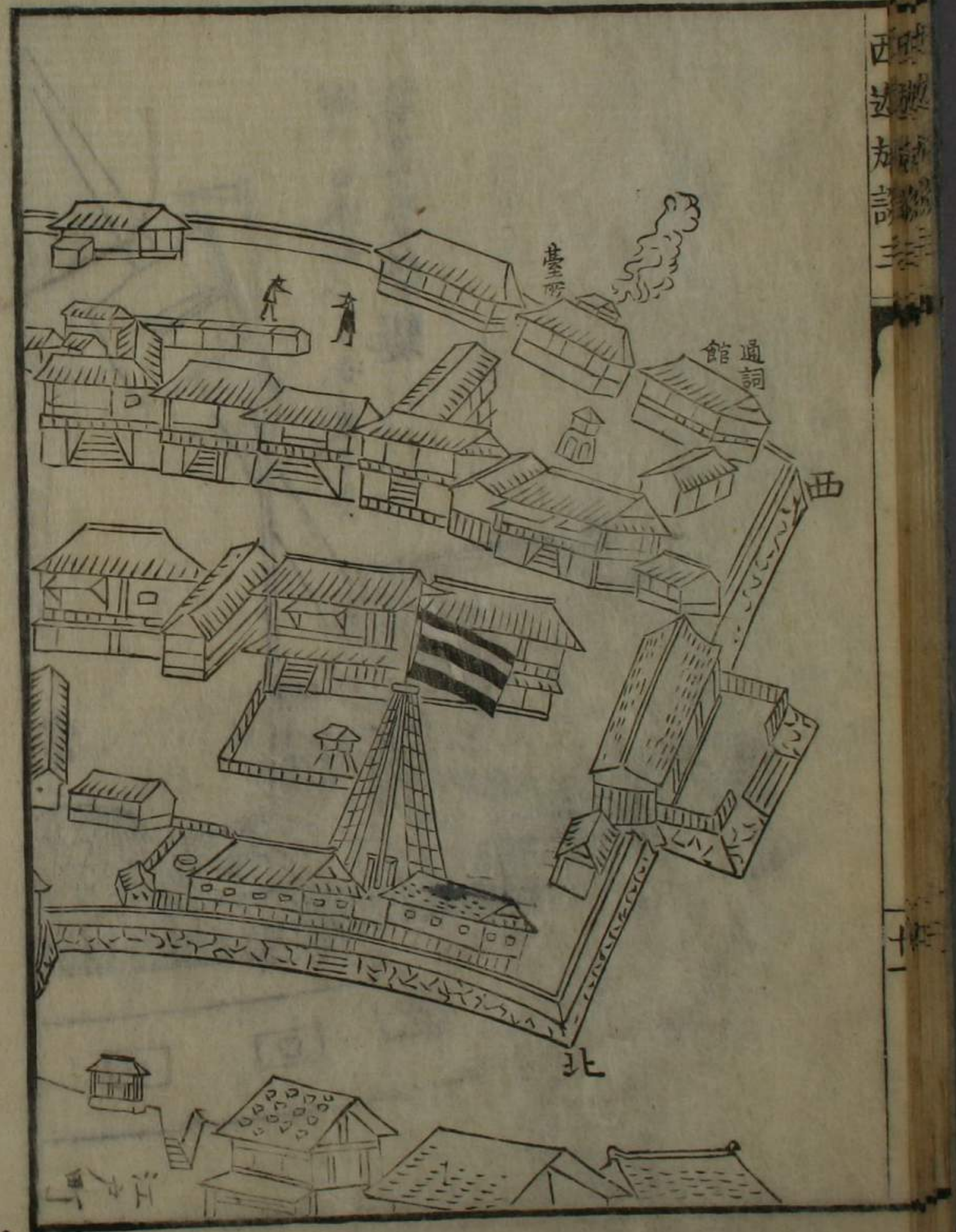
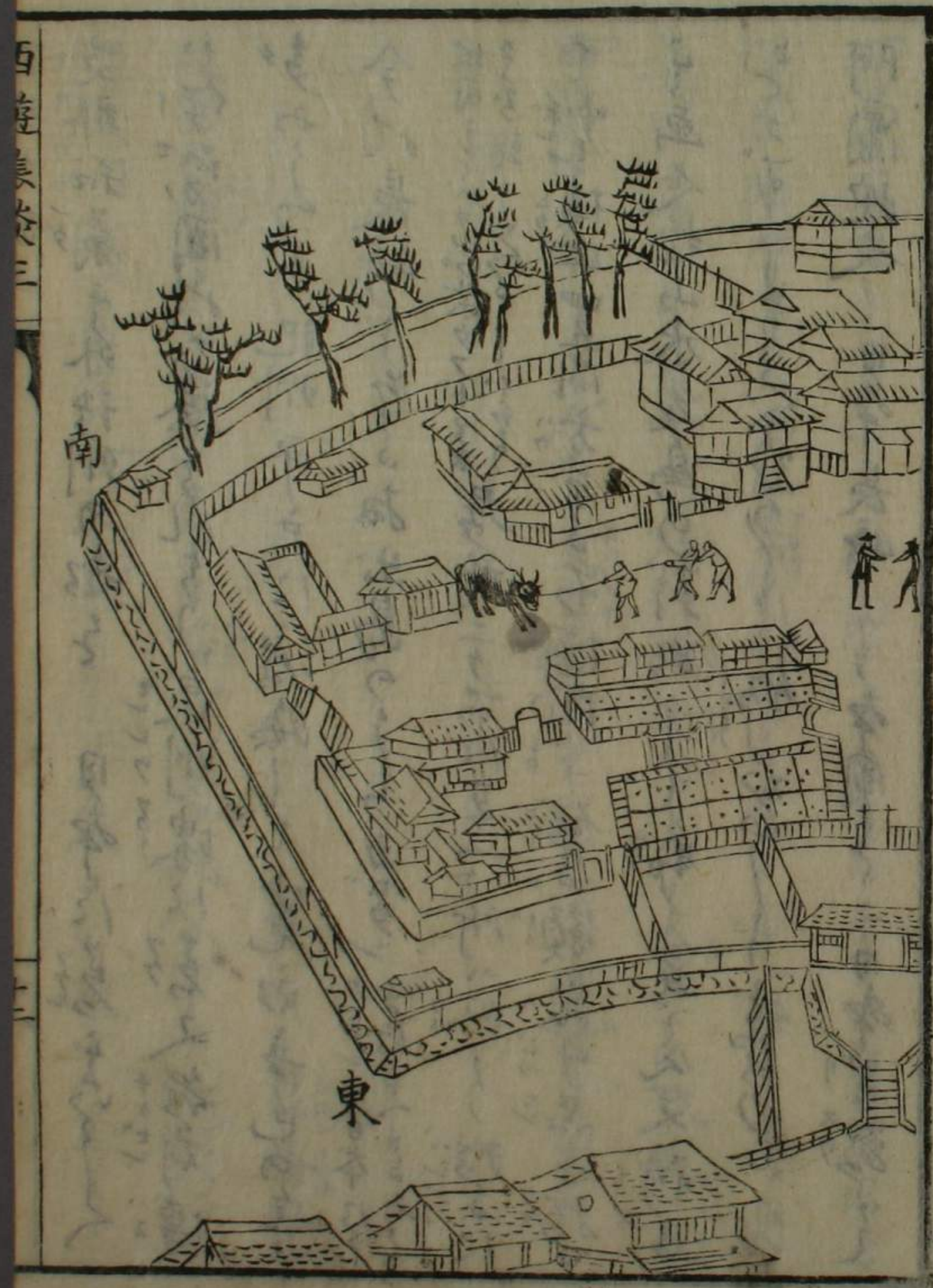
黒

帆

黒

色黒

白



支那和蘭を以て諸州の船を 日本に送るに
 ハ伊勢國に大湊を以て泉州堺に若く又前博
 多ありしを肥州平戸に渡海して寛永辛巳の年
 今これ長崎と名するお出島のうらカビタン
 居所ニテ亦は在ニケ所ハ外より
 樓上四五間方なるお欄間下硝子額數千名を
 画人物山水花鳥の類ありて動くものも又椅子
 等を置くものありしは此の如しと云り
 阿蘭陀人 日本長崎より本國より 日本里數あり

一萬三千里と云ふに
 ず此 日本より西に航すれば
 ありしを以て生ませばパン
 或牛肉を以て食する故に印度
 亞法より船を先づし交易を以て第一乃國勢なり。

彼國の海はハスワトヨゴ
 阿蘭陀人の下奴と云ふ
 其國より

島崙島

要害にともり幸もまきし一かたの穢を好しき事
 此國に火とくしき津の山に音山は郷音
 霹靂のどし荷物と船の底の積電も下わりの
 相と知所りし下に入船の貯り多し船をヤン
 消火もかきん是をまき通せし故にウエントル
 臭と製しきと通せし支那の船の粗きを阿蘭
 船の精の甚るしき事あり

ウエントル之圖

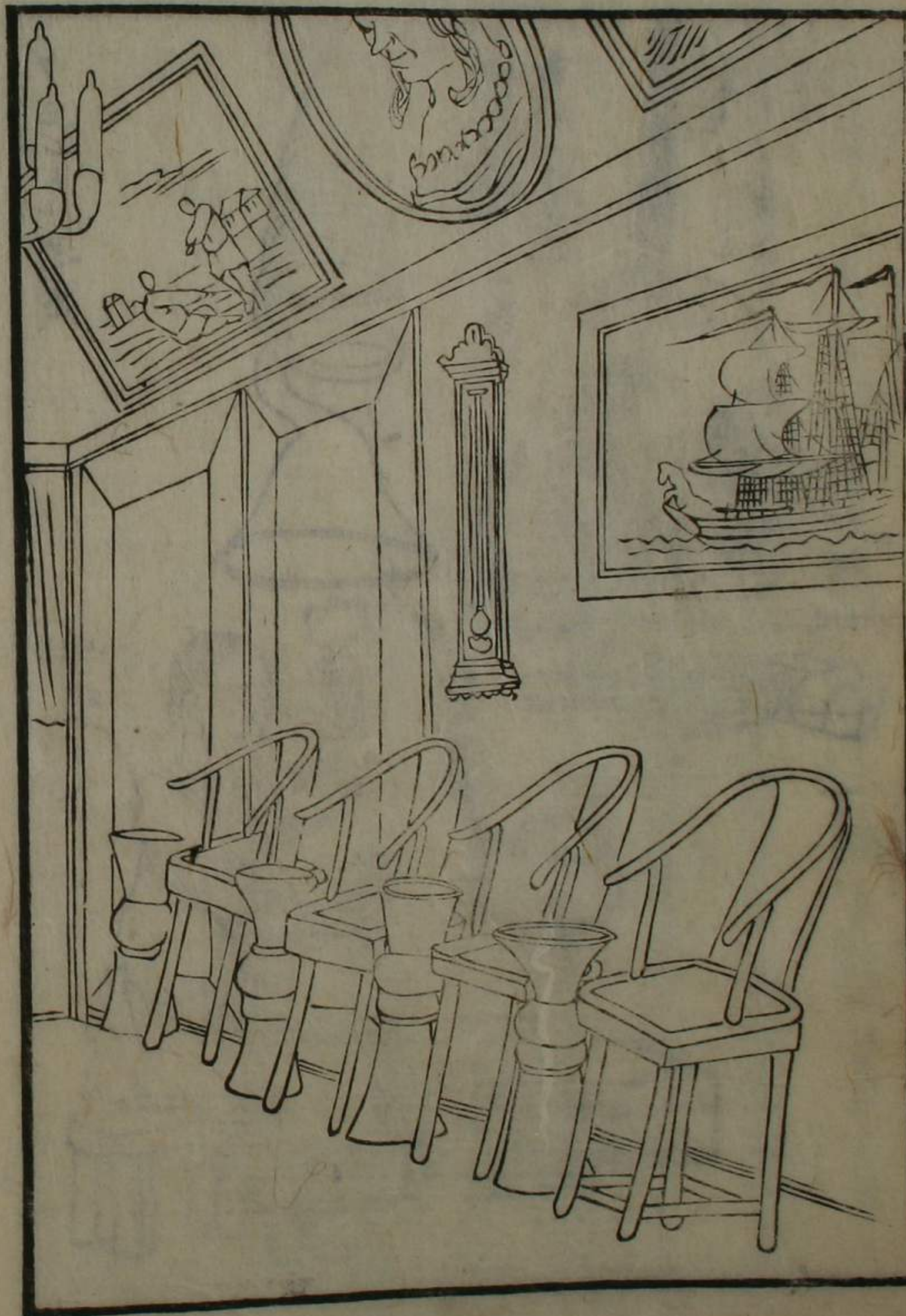


船硝守人

海底に沈しき物
 取らんとす
 是もウエントル
 と名くまきと
 通せ



西洋雜貨



西洋雜貨

十五

クロニボク
山嵐奴 スワルトヨシゴ之圖
夏月ハ鯨タマハメ圖

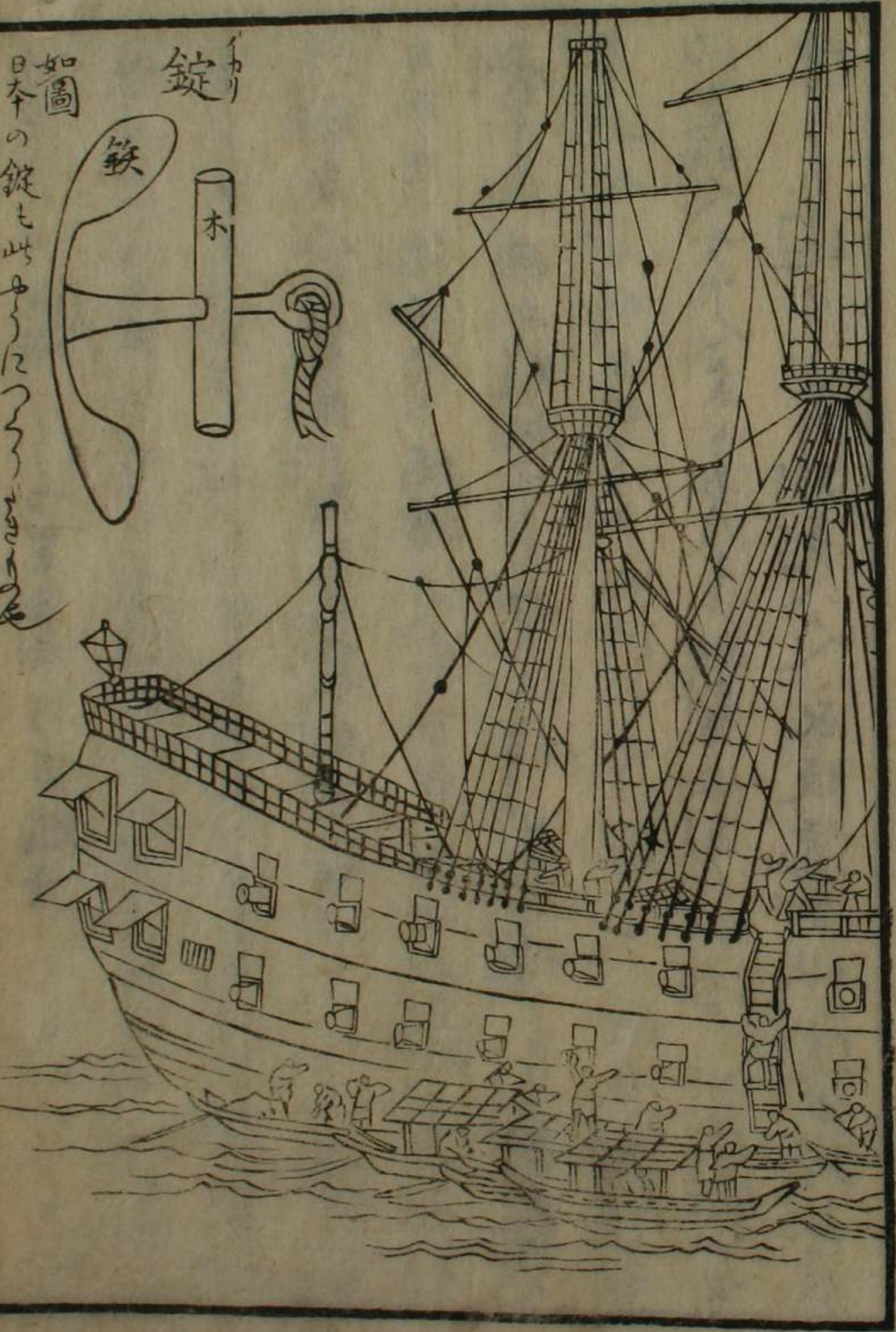


マタロス之圖



西遊記卷之三
 如圖
 日本の錠も此の如くにして
 鐵

錠



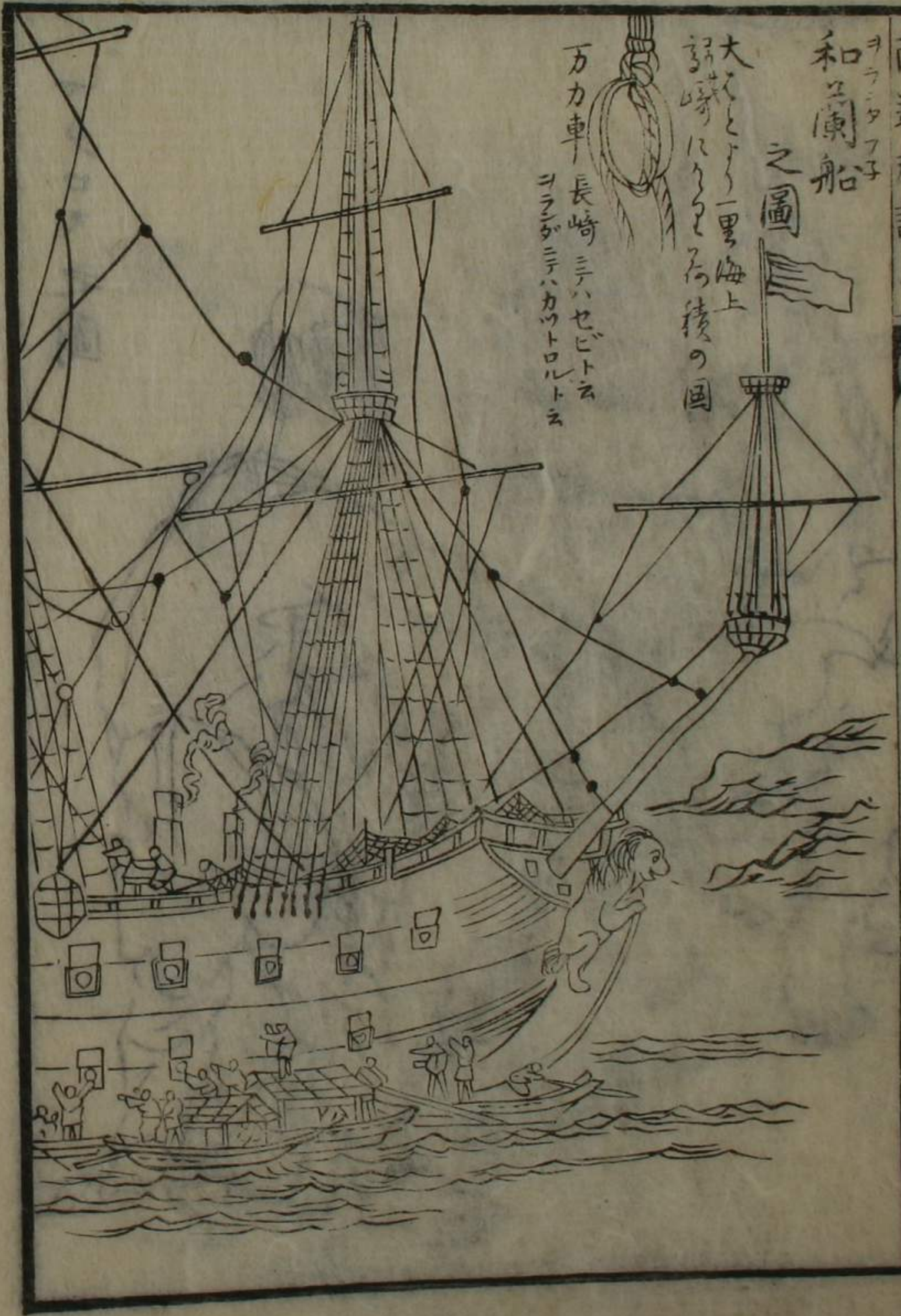
西遊記卷之三

和蘭船

之圖

大船とて一里海上
 浮遊し居る所の國

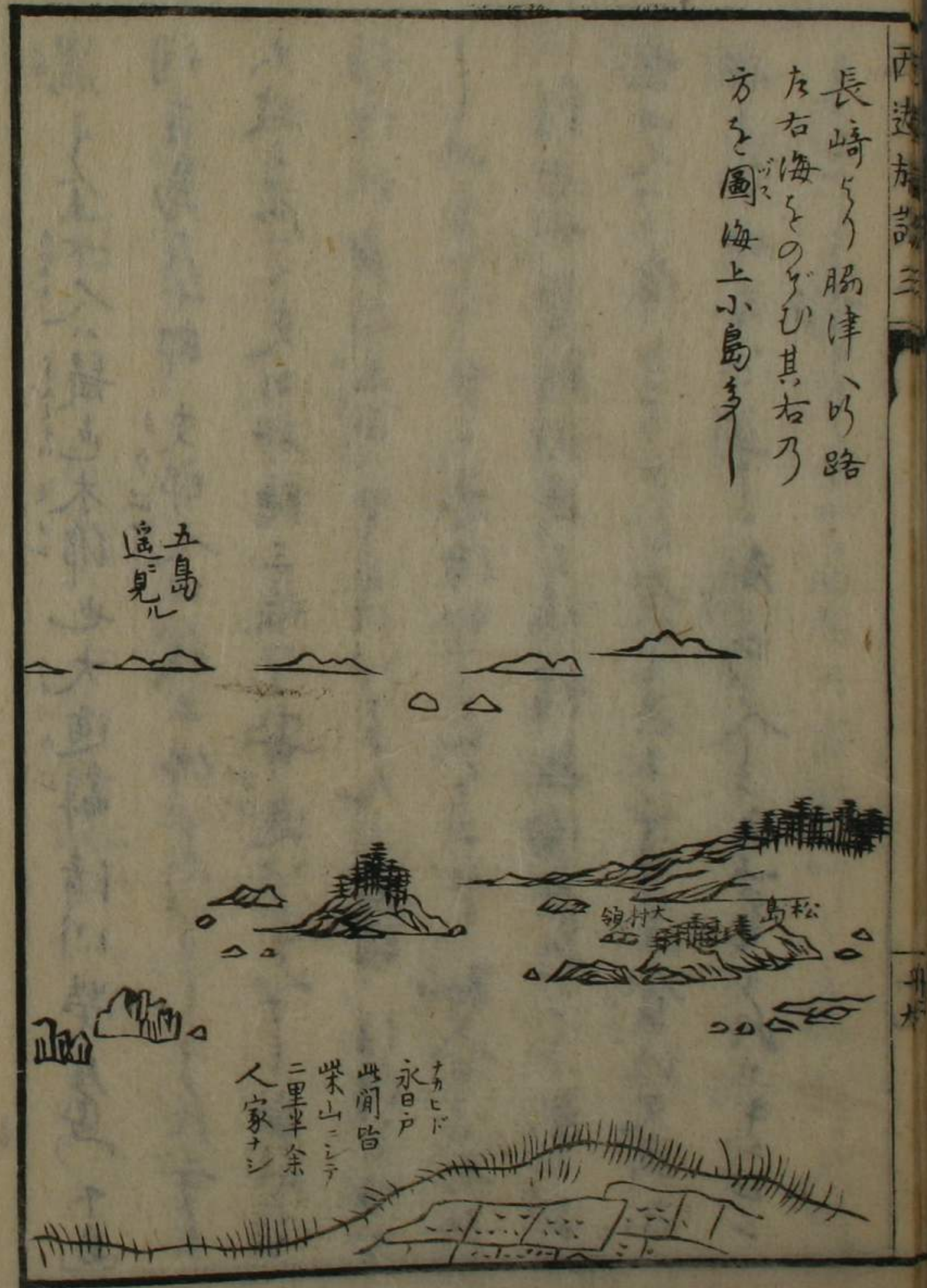
方力車 長崎ニハセビト云
 コレガニハカウトルト云



廿七

十月十二日長崎より七里西南乃方脇津と云ふ所より戸町
 深堀より云ふ所より山路と云ふ所より岩を踏む
 事二里半余山乃頂人家あり右の方遙に五島を見
 是より左の方天草島又島原肥後の國見て向所此國
 四八里日本乃絶地なり脇津人家百軒余此を琉球等
 食ひ風土暖地なり雪不降サボテン橙生れ奇草を
 見たり廿八日朝五時より大波戸より舟より稻佐悟真寺
 以支那人七人余と乗舟し船岸に舟を停て鼓笛吹
 寺より送るも野長八人衣服儒子紗綾の類色く

黒く余下人ハ鼠色木綿也大通辭清川榮左衛門下通
 詞吉島左十郎支那人曰我ハ佛系なり寺も
 大破るる夫ハ砂糖三俵ヲ寄進しとて舟に
 住僧は身持石正ハ其舟にいそんと通辭住僧と呼ぶ
 一此舟より舟老僧かゝらとて舟に恥入る船長
 ハ程赤城費精湖周壬祿程敬倫の如く卓子
 盤四人の席をこゝろに余も共らばし食ひ又画
 描り姓名を尋る都の人と云ふとこれハキンジン
 キンジンと云ふなり



長崎より脇津へ以路
 左右海をのぞむ其右乃
 方を圖海上小島多し



肥後

桃島



長崎ヨリ七里
西ノ方脇津

此所ニ三崎ノ観音アリ
長崎ノ者多ク参詣ス

島五

遠見

脇津

芝山ニシテ
木ナシ



支那人ハ卧葬
トテ卧タレ、
葬ル

西遊記卷之三

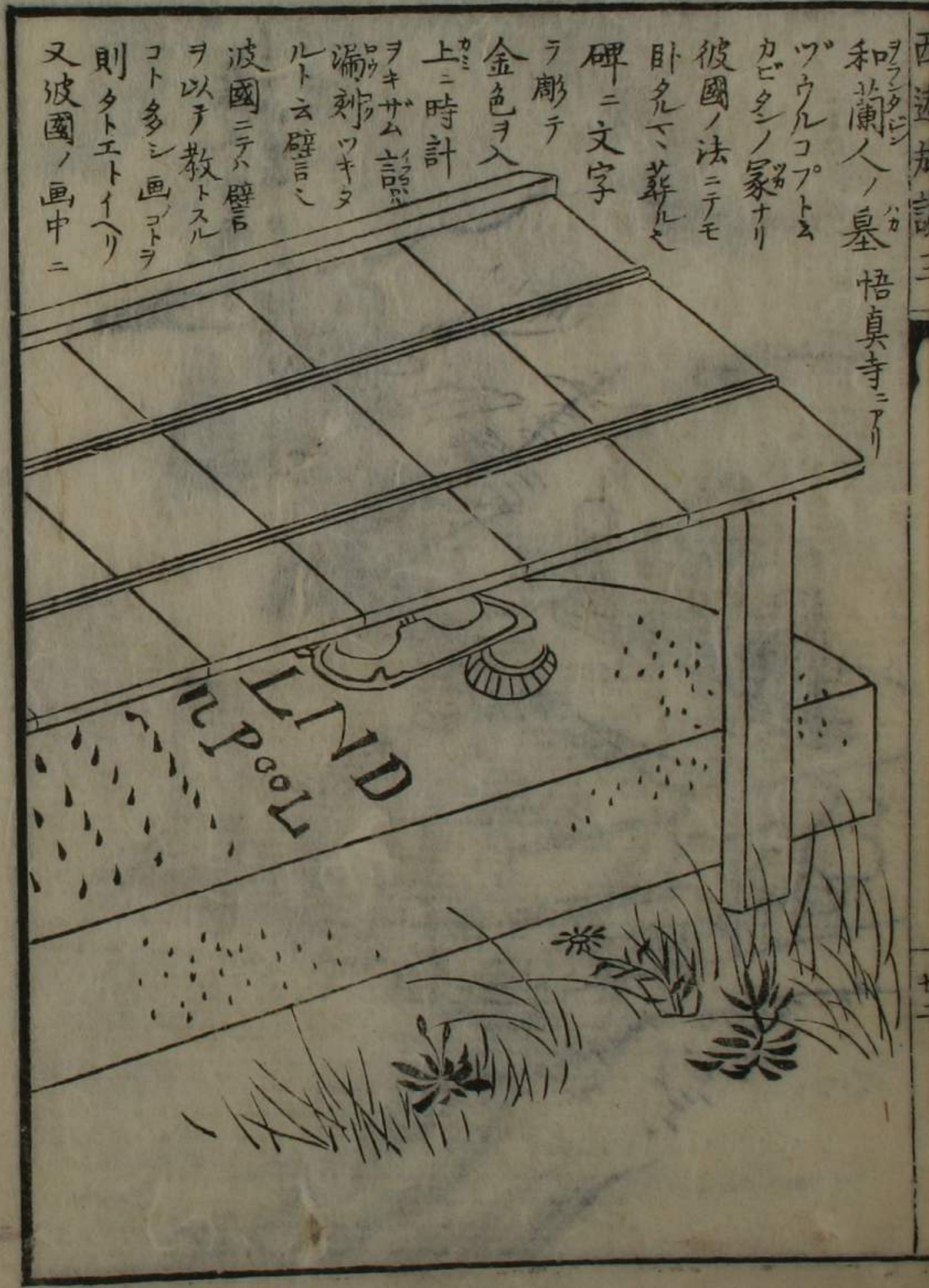


悟真寺支那人之墳墓

衣類財寶ヲ
紙ニ描入大中ニ

西遊記卷之三

七



和蘭人ノ墓 悟真寺ニアリ
 ツウルコポトモ
 カビタノ家ナリ
 彼國ノ法ニテモ
 卧名マニ葬ル
 碑ニ文字
 ラ彫テ
 金色ヲ入
 上ニ時計
 フキサム
 漏神ツキタ
 ルト云壁言
 波國ニテハ壁
 ヲ以テ教トスル
 コト多シ画
 則タトエトイ
 又波國ノ画中ニ



兩翼人ノ物或ハ
 異形花圖アリ皆
 夕トヲ画シタルモノナリ
 カツテ羽ノアル人ノアルハ
 アズ

百選集卷之三

ナ

稻佐辨天

浦上方

十一月十四日長崎ヲ
發シテ三里時津
ヨリ平戸島ノ方ニ
渡リ鯨ヲ見ル
鯨ノ圖ヲアヌシ
メツラシキコトヲ話



支那人年始ノ手札
紅紙ニ書ス

山ノ4日子

新
嶺

嶺

丁程
醒赤
齋城
恭

山ノ6日子

